

トランスジェンダー

をいきる

(12)

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

「非もて」から「もて」へ

1 はじめに

今回は、男性性に拘るあまり、寡黙で冗談が通じなかった私が、どのようにして冗談を駆使した言語表現を身に付けたか、その際に意識した「男性からもてること」を含め、今後どのような課題に直面しているかについて記述する。

2 笑顔を要求した女性教師たち

小学生のころの私は、「冗談の通じない堅物」であった。だがそこには、小学生の私なりの「計算」が多分にあった。すなわち、「男はいちいち冗談を言わない」、「男は、言われた冗談にいちいち反応しない」という、自己の強固な男性性に基つき、そのつど冗談を排除していた。

冗談の発信者の多くは、担任の女性教師たちであり、私の苗字や身体の特徴を背景とした質の悪いニックネームもその中に入っていた。当時、私が担任の女性教師たちから発せられたニックネームの一つに、「牛若丸」というのがあった。このニックネームは今でもよく言われるのだが、私はこの「牛若丸」というのが大嫌いであった（今でもそうである）。日本の社会の人たちが、都合よく構築した歴史的人物に対して、何がしかの反発を抱いていたからである。また、当時私は、クラスの中でも痩せていたので、「電柱」だとか、「きゅうり」などの棒状の物を私の体系と関連付けて呼んでいた。私にとって、これらのニックネームは、質の悪い冗談としてしか受け止められなかったもので、笑うに値しなかった。その質の悪い冗談を真に受けて怒り、抗議の意思を表明したとき、担任の女性教師たちはいっせいに「笑顔を要求する」という方向性に転じた。その背景には、女性のジェンダー役割として、冗談の質とは無関係に、「笑顔の無償提供」を是とし、そこに教師であることの権力性を上乘せした暴力と恐喝がはっきり見て取れた。そこで私はそのよ

うな女性教師たちの顔前に、「男は、女から求められて笑うような単純な生き物ではない。笑いたいときに自発的に笑うのが男であること」を示した上で、ますます担任の女性教師たちとの確執を拡大していったのである。

一方、特に一部の男子児童たちからもそのような私へのバッシングが強かった。「男・女」「女の癖に根暗なやつ」というブーイングも含め、一部の男子児童たちの中からも、女性ジェンダーを背景にした、冗談の質とは無関係に「笑顔の無償提供」を要求する声が相次いだ。これは、一部の男子児童の中にも、女性としてのジェンダー役割に「笑顔は必須」という心性が内面化していた結果であろう。そのようなバッシングやブーイングにも関わらず、質の悪い冗談やからかいに対しては、徹底的に抗議の意思を表していた。

要するに、小学生の私は今でいう「非もて少年」であった。この「非もて」こそ男の要、といわんばかりに、自己の看板として掲げながら、数々の冗談を「質の悪いもの」として貶めながら、その「非もて看板」をひそかに守っていた。

3 抗議の意思を含めた「うけを狙った悪戯」は、男の子からの賞賛を得られたのか

だが、中学生になって「男の子からもてたい」と考えるようになった。そのきっかけは、男の子同士の友人関係を観察していたときのことである。男の子同士のホモソーシャルな関係性において、「一定の冗談やからかいを受発信する必要性」を痛感した。このことは、男の子から「つまらない根暗なやつ」と思われることによるジェンダーレベルでの少年同士のホモソーシャルな関係性からの脱落に対する恐れや恐怖もあったが、「おもろい少年になりたい」という、自己の男性性のキャラクター変革への挑戦を試みたいという欲求が日々強まっていったからである。すなわち、「男は、冗談を言うものではない、まして冗談に対して、いちいち笑うものではない」という感情を封印した自己のこれまでの男性性のあり方から、「冗談をどのように他者に発信していくか、他者からの冗談をどのようにして軽やかに受信することができるか」というスマートでタフな男性性のあり方を模索しようとして試みた挑戦であった。

しかし、当時の私には、そのような冗談に対する受発信を、他者とのコミュニケーションツールとして円滑に行うスキルはまったく持ち合わせていなかった。特に、他者から発信された冗談に対する免疫力がまったくなかったので、いつも真正面から抗議の意思を表していた。そのような自己に対して男らしくない、つまらないという感情を沸きあがらせたのは、第二次性徴に伴う身体の女性化とジェンダーの男性化の間での葛藤であったことが考えられる。

そこで、まずは自己にとって難しい他者からの冗談への受信者になるのではなく、自らが何らかの形で他者への「うけを狙う発信者になること」を試みた。その試みとして行動化したのが、「うけを狙った悪戯で、抗議の意思を表す方法」、すなわち、直接抗議の意思を表すのではなく、他者からの「うけ」を狙った悪戯で、抗議の意思をカムフラージュすることによって、特に男の子からの賞賛を得たいというイレギュラーな戦略であった。そのターゲットになったのは、中学校3年生のときの公民の男性教師であった。

当時のクラスメートは、私を含め、女子ばかりの4人であった。彼は女子ばかりのクラスであることを理由に、授業中卑猥な言葉や表現で私たちをからかいの道具として利用していた。女の子として扱われたことへの怒りとは別に、授業をまじめにしないで、卑猥な話題を口にする彼に対する抗議の意思をどうしても表したいという思いで、授業をボイコットし、担任の女性教師を

通じて彼に抗議文を書いた。

ところが、担任の女性教師は、私の抗議文を読むどころか、そのような抗議文を書いた私を叱責した。その叱責した内容の中に、次のような文言があった。「大の男が頭を抱えているという行為に至らしめたあなたの抗議文が、どのような意味を持っているか反省しなさい」。黙しながら逆上した私は、今度は直接彼への抗議の意思を表すために、次の方法を編み出した。

その年のバレンタインデーは、彼の授業があった。私は彼にチョコレートと称して、使用不能になった単3乾電池を、チョコレートの箱に入れ、包装して渡した。授業中にも関わらず、喜んで受け取り、包装紙を開いて愕然としていた彼の反応は、他の女子のクラスメートの「うけ」を誘った。この女子ばかりのクラスで起こった出来事は、たちまち他の学年の男子生徒にも知れ渡り、驚きと要注意人物という、自己にとっては望まない不必要なラベルを添付された。

このようにして、「悪戯」によってカムフラージュされた「抗議の意思」は、どれだけ彼に伝わったのか、また、この「悪戯」によって確かに「うけを狙うこと」は達成したものの、それは当初自己の設定した目的とは大幅にずれた「要注意人物」という不必要なラベルによって、「男の子からの賞賛を得たい」という目的達成の難しさと、スキルの未熟さを同時に痛感した。

4 漫才や落語へのアクセスによる笑いを誘う言語表現の探求

先の悪戯による失敗を踏まえつつ、高校生になってもなお男の子からの賞賛を得るための探求は続いた。その素材になったのは、漫才や落語による言語表現の場であった。中でも、読売テレビ系の『笑点』は、私の笑いの言語表現を身に付ける格好の素材になった。関西系の方言とは異質な風情で、人々の笑いを誘うという言語表現に魅力を感じたのは、関西生まれ、関西育ちにも関わらず、当時は関西系の笑いを誘う言語表現への強い嫌悪感も手伝って、自己の独創的なキャラクターを他者との間で構築したかったからである。

しかし、そのような言語表現を探求した成果を、他者とのコミュニケーションツールとして使いこなすには相当の時間を要した。自己の表現したい冗談や笑いのネタを、他者に先読みされてしまうということが多々あった。しかも、言語表現の素材にしているネタを利用してアレンジした冗談は、関西系ではないために、ほとんどが関西系である他者との間でしばしばずれが生じ、自己のキャラクターが極端に浮いてしまう場面も多かった。このことは、同じ国内でありながら、文化の差異を表していると言う意味で、関西圏であれば、関西人なりのステータスを身に付けるべきという決め付けや強制が、暗黙のうちに自己に課されたためであろう。

5 点字による「男読み」によって分かってきた関西圏での「笑いを誘うときのステータス」への違和感

では、思い切って、強く嫌悪していた関西系のネタや冗談を話題にした笑いを誘う言語表現を身に付けることへと方向転換したのかといえばそうではなかった。ここで登場してきた最後の手段が、前回詳述した点字による「男読み」で、漫才や落語関連の書籍をはじめ、多方面のジャンルを濫読することによって、さまざまな言語表現のあり方を身に付けていくという手段であった。

確かに、関西圏での笑いを誘う言語表現には、一定のルールがあるようだ。その代表的な手法が、他者から発信された冗談やネタをただ受信するだけでなく、その発信された冗談やネタに「乗る」という方法で、冗談に冗談を重ねて、共に笑いを誘い合うという相互行為によって、社交辞

命をも含めた他者とのコミュニケーションを円滑に図るという役割を果たしている。しかし、この方法は、互いの冗談やネタに対して「乗ること」を強制し、その役割を相互に押し付け合っている。また、他者から発信された冗談やネタが、どんなに笑いを誘うレベルに値しなくても、それを無理して「笑わなければならない」という強制力を生み出している。このことは逆に、その冗談やネタを、笑いへと誘うレベルに引き上げることを暗黙に、時には言語化して相互に要求し合っていることにも繋がる。さらに、複数人の間でこのような笑いを誘う言語表現を伴ったコミュニケーションがなされた場合、その笑いを共に感受することができなかった他者に対する排除ははなはだしく、特にその他者が、何らかの理由で、関西圏との関わりがあればあるほど、関西人としてのステータスを要求される。そこには、同じ関西圏であっても、笑いの感度はそれぞれ異なっているという認識や考慮はまったくなされていない。私が関西系の笑いを誘う言語表現のあり方に強い嫌悪感を抱いた理由は、このような社交辞令をも含めて、冗談やネタに対して相互に「乗ること」への押し付け合い、相互に笑いを誘う言語表現のレベルを高めることへの強制力を発動し合うこと、さらに、複数人の間で交わされる笑いを誘う言語表現を伴ったコミュニケーションに対するリアクションがない・または希薄な他者への排除と、関西人であることへの強烈な仲間意識による他者へのステータスの要求、個々の他者への笑いの感度に対する配慮の欠如であることがわかってきた。

6 終わりに――すべては、「非もて」から「もて」への移行のために

私がこのようにして、「笑いを誘う言語表現」に着目した理由は、「非もて」から「もて」への移行を目指していたからである。そこには、男性性に内在するタフさ・スマートさを単に強調したいというだけでなく、女性の身体を有していても、男であることを表現する媒体としての言語コミュニケーションのあり方を研究することによって、男性同士のホモソーシャルな関係性の中に参入したいという欲求を全面に出す必要性を痛感したからである。

だから、この場合の「もてる」対象は女性ではなく、男性である。すなわち、男として男にもてるには、どのようにすればよいかを、日々考えなければならなかった。

とかく、男性同士のホモソーシャルな関係性においては、「冗談」や「からかい」を「共有すること」を重視し、たとえその冗談やからかいが行き過ぎたものであっても、それをうまく交わさなければ「男としての承認」は得られない。これは、須長が「ハゲをいきる――男性と男らしさの社会学（勁草書房 1999）の中で指摘しているとおり、男性同士の間で「人格のテスト」（須長、1999 p170）が行われているからであろう。そのような男性同士のホモソーシャルな関係性の中に、不必要な仲間意識の共有を是としない私が参入できるのか。このことは、自己に対するある種の苦渋の問いである。では、この問いに対してどのように結論を出すのかが、現在でも課題として残されている。

うしわかこうじ（立命館大学大学院先端総合学術研究科）